

## かげろう An Ephemera

22歳のものに手を加えて

いまだまりこ

茜のさした池のほとりの、水面に突き出したとある葉の上に、一匹のかげろうがいた。

今しも、脱皮を終えたばかりのか細い、まだ伸びきらない羽をじつとさせて、時おり、恐る恐る新鮮な空気を吸い込んでいた。

辺りを見渡すと、既に飛んで行った抜け殻が、ちらほら水面を漂っている。

あたりは、静まりかえっている。

かげろうは、どうやら、自分だけであることに気づいた。

それに何か、いつもと違う軽やかさ。

見下ろせば、からだはうすい白い緑色をしている。

羽は透明なベールがかかり美しく、これが自分だとは信じられないくらいである。

空は青から薄紫に茜色。

木々が名残の夕映えに照らされ、揺れている。

胸一杯に吸い込んだ息は、これまでで一番のおいしさ。

身体中に期待と希望が広がった。

水の中にいるときは、今、見えている池が全宇宙であった。

3年間、恋焦がれた水の外の世界。

そこに、こんなに新鮮な世界があるとは一度だって考えたことはなかった。

この感動を誰かに教えてやろうと、つと身を乗り出すと、どこから漂ってきたらしいかげろうの白化した死骸が見えた。

かげろうは、ちよつと青ざめて、嫌なものを見たと思っただ。

かげろうは薄みどり色の透明な羽を試しに羽ばたいてみた。

すると、からだは軽やかに舞い上がった。ほんの試しのつもりだった。

もしかしたら、戻ろうとさえ思っていたのに……。

先ほどまでいた葉が小さくなり、まぎれてどれかわからなくなつた。

次第に生まれ育った池が、小さな水溜りのような点となり、緑色に没した。

空を自由に飛ぶなんて想像の世界でしかなかった。

初めて見る世界が次々と風景を変えて行く。  
水の中で、一緒に育った仲間達と、外の世界はどんなのだろうと  
言いあったこともあった。  
どのくらい長い間、水中で暮らしたのか記憶にない。  
けれど、何百回もの朝と夜が来た。  
途中、何度も苦しい脱皮の儀式があった。  
脱皮の儀式を超えないと、大人にはなれないと励まされた。  
とうとう旅立つ日。  
先に生まれた仲間たちが、水から出て行った日のこと。  
そのあと、水面に脱ぎ捨てられた皮が浮かぶのは、何度も目にし  
た。  
「じゃあね。行って来るね」  
と言って旅立つ。  
しかし、誰一人として、戻ってきたものはいない。  
先人たちが、幼虫を残して忽然と消えて行ったので、水中の世界  
では『神隠し』だという噂も飛び交ったりした。  
いつか自分もと思いつながらの今日の旅立ち。  
仲間達は、早々と飛び立ったのか、見当たらない。  
実は、もっと早くに羽化したかげろうたちは、明るい中で目ざと  
いツバメや鳩に襲われていた。  
命からがら逃げ出した者もいた。  
そんなことは知らないから、もう随分と仲間達は遠くへ行っ  
まって、自分だけ取り残されたかのように思えた。  
少し寂しい気もしたが、前途は明るいと思えた。  
空がどこまでも青く続いている。  
しばらくすると太陽は西に傾いた。  
空は水色から、黄金に染まり、茜色に変わろうとしている。  
そよそよと心地良く風が吹いている。  
ふんわり、樹木のトンネルを通り抜ける。すいと風に体が浮き上  
がる。  
また、急降下する。  
ああ、なんて心地よいのだろう。  
太陽の日差しも、木々の木陰も。  
目を閉じて、ふんわり漂っていた。  
何て、素敵な世界なのだろう。  
精一杯、息を吸い込み、その小さな肺を満たす。  
水が煌いて。  
茜色の空の透明な美しさ。  
樹木のトンネルの一枚一枚の葉や枝の一本一本が、美しく、心が  
ふるえて感動で、涙ぐみました。

水中の世界のことなど、遠い昔のことよう。

「ああ。なんて、気持ちいいんだろう。」

軽やかなからだは、すいと浮き上がり、急降下する。

目を閉じてふんわり漂う。

気持ちよく飛んでいた。

地上のありとあらゆる美しいものを見たい。

そう夢見心地で、ふいと、浮きあがったとき、

「あっ」

その瞬間、からだがり張りが付いたようになって動けなくなった。

もがけばもがくほど、ますます動けなくなる。

かげろうは、ぎゅっと目を閉じた。

恐る恐る目を開けると、繊細なロープが綺麗な螺旋を描いている。

糸は黄金に輝いている。

そこにほんの少し羽根が絡まっているのが見えた。

「ああ……」

絹の様に細い糸が張り巡らされた蜘蛛の巣に引っ掛かってしまっ

たらしい。

かげろうの薄緑色のからだは、ますます青くなった。

空が見える。

梢は、はるか上にあり、地上に別れを告げる夕日の最後の赤銅金

色の光が木漏れる。

鳥がさえずっている。

音が、一つ一つ聞き分けられ、全ての機関が研ぎ澄まされた刹那

の中に永遠を感じた。

それまでは、意味をなさなかった大きな音が、木々に群がる蟬の

大合唱であることに気づく。

蟬どもも必死に、からだを震わせ啼いている。

樹と見えた幹には、茶色のかてかした大きな怪物のようなカブ

トムシもいた。

それに小さな蟻。さらに小さな葉に付くアブラムシ。せつせと動

き回る。

かげろうは、羽化してから飛ぶことに夢中で周りの世界がまるで

見えていなかった。

羽根に絡んだ糸がわずかに揺れる。

蜘蛛が獲物の気配を察し、動き始めていた。

大きく糸が振動する。

せわしなく波打っていた心臓の鼓動が緩やかになり、冷や汗も出

始めた。

空を飛んでいるときには感じなかった涼やかさが、暑さの中で更

に体中を冷たくした。

このままでは、息が詰ってしまいそうだ。かげろうは、ありったけの声で叫んだ。

「いやだあ！たすけてー！」

「この世に生まれて幾許もないのに、もう、終わりなのかな……。なんて、あっけないのだろう……。涙がとどめなく流れ落ちた。すると、その時、不意にからだが軽くなった。すつと糸がはずれ、くるくる落ち始めた。胸の鼓動が激しくなる。

何が起こったか訳がわからないまま、精一杯羽ばたいてみた。落下する速度が緩やかになる。

「アッ」

黄金虫がだみ声で怒鳴った。

「居眠りすると、ろくなこたあない。ああ、痛い。いたた。」

「……ああ。あり、ありがとう」

自分の声じゃないように響く。水中から出て、初めて喋った。

「ありがとう？ ふうん、かげろうか。」

黄金虫は、腰をさすりながら、かげろうの羽に絡んだ糸を見つめた。

「はあ、おまえ、蜘蛛につかまっていたのか」

「うん、死ぬかと思った。助かった」

かげろうの目にはまだ、涙の跡があった。胸の動悸も激しい。

「こっちは、えらい目だ。痛ったあ。やれやれ。ちびのかげろうかあ」

「ご、ごめんなさい」

黄金虫はまだ、腰をさすってる。

「はあ、やれやれ。息が止まるかと思ったのう。おい。かげろうやあ、いつ、生まれた？」

「多分、今日だと思う。まだ、ずつと明るかった」

「そうか。それでくもの巣に引っ掛かったな。じゃが、命を無駄にしちやいかん。まだ、子供で目が見えとらんしなあ……。」

「子供じゃないよ」

「いやいや、まだ子供じゃあ。」

「空だつて飛んだんだよ」

「ふふん。もう一回、服を脱がんと大人じゃない。」

「そうなの？」

黄金虫は、うんうんと頷いた。

「お前の命は、ただでさえ短い。」

「短いつて？ 水の中に、もうずっと居たんだよ。」  
黄金虫は、僅かに絡んだ糸を丁寧に取ってやった。

「羽は、痛んどらん。飛べるはずじゃ。わしらの命は、厄介ごととに巻き込まれん限り、ひと夏、晩秋まである。世の中のことをたんと見る時間がある。わしなぞ、去年生まれて、冬越しをした長老じゃ。じゃが、お前たちは、たいてい、夕方生まれて、翌朝には、子供を生んで死んでしまうはかない命じゃ」

黄金虫は、上を見ながら、淡々と語る。

かげろうは、腕をさすりながら、聞いていた。

蒼ざめた。そんな話をきいて、ようやく、色を取り直したかげろうは、再び

「長さじゃないぞ。お前たちの時間は、ひと時、ひとときが貴重な宝石のようなんじゃ。今を大切にするんじゃ。さあ、お出掛け」

「ありがとう」

「気にせんでええ。」

黄金虫は、後ろ向きのまま、早く行けというように手を振った。

黄金虫は、もう他の事に気を取られているようだった。

涙ぐんでいたのをかげろうにしられたくなかった。この一年余りの間に沢山の別れを経験した。

かげろうと二度と会う事はない。そのことを知り尽くして生きて来た。

最初の試練を何とか乗り越えたかげろうを愛しく思えたが心配でもあった。

「さあ、行くんじゃ。お前さんの居場所はここじゃない」

そう言われ、これまでになく孤独感を覚えたが、かげろうは、ゆつくりと羽ばたいてみた。

少しこわばった感じはするが、飛べそうだ。

「さようなら、ありがとう」

「大事にな」

かげろうは、黄金虫の背中に声を掛けた。

黄金虫は、別れを告げるように触角を動かした。

黄金虫の仲間が、夜に向けて集まり始めていた。

かげろうは、それから少し飛んでみた。こわごと、近くの木に

舞い降りる。

もう、先ほどの場所は、何処だったか見分けが付かないくらい、どこもかしこも同じように見える。

いつしか茜色の空は、次第に紺色から薄墨色へ移ろう。

ようやく、此処まで飛んで来た。

次に何か起きやしないかと怖くてからだがすくむ。

かげろうは、不安を覚えながらも、暗がりへと目を凝らした。

初めてのことだらけ。生まれたときより、更に恐くなった。

このまま、この場所で、じっと縮こまっていたいような気もする。

しかし、まだ誰とも出会っていない。かげろうは勇気を振り絞り舞い上がった。羽ばたきながら、空を見上げると、藍色透明な宙を背景に光りが見えた。

幽かな、明るく瞬く光が一つ一つ、見る間に増えていく。あれは何だろう？

星とはこんなにまばゆいものだったのか。

水中から見た星は、滲んだ光のおぼろな点だった。

知らないことがたくさんある。

なんて、知ったかぶりだったのだろうか。

水中では博学でも、地上では、無知であることを実感する。

体は、先ほどより重いものの舞い上がった。

すると、遠ざかる黄金虫の背中が、きらりと光った。

かげろうの薄緑色の体は、不安定に上下した。

時折、ヒューッと音が鳴る。

すぐ近くを黒い大きな鳥のようなこうもりが飛び交っていた。一度などは、こうもりが体を掠めた。

かげろうは、危険を感じて、再び、地上へ近づいた。

近くで川のせせらぎの音がする。

天頂付近で半分の月が輝きを増した。先ほど迄の暗がりには、月光に照らし出された。

せせらぎの上に張り出した枝の上で今晚は休むことにしよう。

なんだか、疲れた。

まだ使いなれない羽をしまいこみ、葉の裏へ回った。

もう暗くて、川面は見えなかったのだが、かげろうのような羽虫が一生を終えて、たくさん川面を漂っていた。

せせらぎでは、川魚たちが舞い落ちたごちそうに舌鼓を打つ。

蛙や燕も、飛び交う虫を食べた。

すっかり夜の帳がおりた。

その頃、辺りにほのかにまばゆい緑やお色の蛍光色の光りが点滅し始めていた。

そこにも、向こうにも。

一つと思いきや、何個も、何十もの光を発する蛍が集まり離れ。光りは舞い上がり、乱舞し始めた。

空でも星がきらきら瞬く。

空でも遙か暗がりでは雲のような川が見えた。

かげろうのからだも、はかない光りに時折、照らされた。

蛍たちは、ざわざわ、緑や黄色、オレンジ、青の光を放ちながら、飛び交っている。

長い光り。点滅する光り。

そのうち、二つの光りが重なり合う。沢山の光りが葉っぱの裏に隠れ、見えなくなった。

そんな、蛍が数え切れないほどいた。ざわざわ。

かげろうは、なんだか、落ち着かなくなった。葉の裏から、上に出て、眺めようとしたが、葉っぱを奪い合う蛍の邪魔になつたらしい。

「あっち行けよ」  
ピカピカ光る蛍と、透明なか細い体の自分との違いを改めて感じる。

自分のからだは光らない。

か細くて透けそうなのは、時間が経っても変わらない。薄緑色のからだを美しいとは思ったが、蛍たちにとっては違うようだ。

かげろうは、ますます、早く仲間を探したいと思い始めた。しかし、もうへとへとで、何故か休めそうな場所を探していた。

どこかで休まなければ、旅や仲間探しどころではない。ふらふら飛んでいると、森の向こうに、ぼつんと灯る明かりが見えた。

疲れた羽根を、奮い立たせるように羽ばたいて、ようやくその家にとどり着き、わずかに明けられた窓から、中をのぞく。

中にはひとりの男がいた。家の中の天井は暗いものの、ランプや電気が灯って部屋をほのかに照らしている。

色とりどりの絵の具が付いたシャツを着た髭面の男は、イーゼル前に立ち、筆を口にくわえてうなっていた。

すぐ傍には、様々な色が混ざり合って、すさまじい様相の塗りたくられたキャンバス。

ずいぶんと離れば、何かに見えるのかもしれないが、ひたすら色が重なっているとしか見えなかった。

かげろうは、それでもようやく安心と疲れたからだを休められると思ひながら、電気の傘に止まった。仲間を探すのはまた、後。

今夜は、ここでゆっくりさせてもらおう。かげろうは、部屋より幾分暗い傘の上で、うとうとまどろみはじめた。

画家は、時折、独り言を言う。

『わしの海はこんな色じゃない。いや、黒を加えようか』

『京都にいったのはいつだったか。去年いやあ、3年前じゃあ』

『おととい来いっちゃ、二度とくるなか』  
時々鼻歌も歌う。

油の匂いもする。  
家の外から虫の大合唱。

リリリリリ、ジジジジ、ズーイズーイズーイ。

男のむき出しの腕や首筋に虫が止まる。

「バシン。  
『えい、くそ！』」

思い切りからだを叩く。

かげろうは、何度目かの、バシンの音で、目が覚めた。

まぶたはなかなか、開かない。

とても疲れていて、このまま、眠っていたい。

ようやく、目覚めた。よく見ると、部屋の真ん中には、てらてら

光るねばねばがある。

部屋に入ってきたときは、気付きもしなかった。

よく見ると、光るねばねば、くるくる螺旋上には、蚊や蠅がた。

動いているもの、じっとして微動だにしないもの。

中には、もう命のない死んだ骸もいた。

大多数は、もがいたり、叫んだりしている。

男には聞こえないのか、ブーンという必死の羽音は聞こえている

のか、時折、睨みつける。

『うるさい』

「ウワァッ、いやだ！こんなところで死にたくない。」

「いやだなあ。くつついちゃったあ」

「運命かア。」

「羽根は動かないけど、ここで、しばらくこのまま、死ぬまで貼り

ついていけないやらならない」

「もう、諦めよう。でも、君、このネバネバの上じゃなく出会えて

たら、結婚したかったねえ」

「そうだねえ。」

「人生、どう生きてても、楽しまなくっちゃね。どうせ、死んでいく

んだ」

「はえどもの歌を歌おうか」

「おう！」

「われらが、ぶんぶんぶん はえ！はえ！はえ！はえ！」

「が！が！が！」

「か！か！か！」

「おう！」

そんな会話をするものもいた。

逃れられないとわかりながら、楽しい時間を過ごそうとしている

ものもいる。  
しかし、もがけばもがくほど、いつそう張り付いていく。



そんな中でも、  
「ここへくるな！ いいにおいでも、まやかしだぞ！」  
「これは、わなだぞ。おいしそうなにおいがするが、絶対に近づくな！」  
周囲に来る虫に叫ぶ。  
しかし、空腹に耐えかねて、羽休めにちよいと足を乗せる、羽をたたんだら、もうおしまい。  
蜘蛛の糸どころじゃない。  
この世は、恐ろしいことばかり。  
男がごそごそ、キャンバスの前から離れた。  
体をぼりぼり搔いている。  
それに、何か煙たい。  
「おい、家から出る！ 毒薬がまかれている！」  
しつこく喰らいつく蚊に、画家は蚊取線香を焚いた。  
血を吸われた皮膚は、ぷっくり膨らんで赤い。  
時おり、ぼりぼり、無意識に搔く。すると、大して痒くもないの  
に一層、痒くなる。  
『くそお』  
絵を描いているので、蚊だろうがなんだろうが、虫と見ればバシ  
ンと叩く。  
「早く出る！ 息をとめろ！ それを吸うと、死んじゃう」  
「前に、えらい目にあつたぞ。早くしろ！」  
「すぐに出るんだ。電灯のまやかしにだまされるんじゃない」  
蠅取り紙のねばねばの螺旋から叫ぶ奴がいた。  
羽と体の殆ど全部が引つ付いて、もがいたために、妙な形でからだも引つ付いている。  
「僕らはもう、駄目だけど、君は生きるんだ！」  
下を見ると、そういえば動かない羽虫たちが転がっている。  
「はやく！ 今だ！」  
吸い込む息は、少し臭いし、体がだるくて、眠りこみそうになる。  
かげろうは、ふらふらと、ようやく窓の隙間から、逃げ出した。  
中には、逃げ切れなかった虫もいたかもしれない。ほかにいる虫たち  
がどうなったか、気がかりだったが、かげろうには、自分が外へ  
抜け出すのが精一杯だった。  
咳が止まらない。息苦しい。  
あれだけ、たくさん  
の虫が出ると叫んだのだ。助かるものは、出  
られたら  
らねえ。外に出ると、虫の鳴き声だけで、蠅や蚊、蛾の話し声や悲鳴は途  
絶え  
えたりひんやり。

ぜいぜい、息が辛い。  
しばらくして、ようやく息が整う。  
柔らかな露のベールが舞い降りていている。  
まだ空では、微かに星が瞬いていた。  
かげろうは、葉の上で、露を飲み、大気を吸い込んだ。  
蜘蛛の巣から逃れ、ちよつと休めたかと思つたのも束の間。  
息が詰りかけ、さらにへとへとだった。  
そのまま、うとうと。  
すつかり眠り込む。  
そのうち、辺りはほの明るく、空は、透明な水の色合いになつてきた。  
がさごぞ、いろいろな物音もし始めた。  
鳥のさえずりが聞こえる。  
辺りが黄金色になるころ、太陽の眩しい光がさした。  
体が隅々まで、温まる。  
ああ、ありがたい……。  
家の中からは、物音がしなくなった。  
かげろうは、目覚めた。  
地面を見れば、アリたちが隊列を組んで、行軍している。  
蟬も、わんさかうるさいくらい。  
夕べ見た、蛍たちは、どこにも見当たらない。  
日差しは一段と強まり、かげろうは、葉の裏へと回る。  
そのとき、ちょうど、えさを探しに鳥がやって来た  
葉の裏の白緑と、かげろうの色とよく似ている。  
かげろうは気付かなかったが、つい先ほどまでいた心地よい葉の上のもう一匹の虫は、鳥についばまれた。  
そうとは知らないかげろうは、ひと時のくつろぎを堪能していた。  
葉の裏は、気持ちが良い。  
風が渡る。木漏れ日が、風に揺らぐ。  
昨夜のことを思い出した。  
蠅取り紙にへばりつき、もう自分の寿命がないとわかっているのに、他の虫へ注意してくれた蠅。  
おかげで、毒薬にやられずに、こうして生きていられる。  
世界はなんと恐怖に満ちたものかと、頭の片隅を掠めたが、はじめて見る朝の風景に、そんな気配は感じられない。  
仲間を探すべきだろうか……。  
今日は、どこへ向かって飛んで行くのがいいのだろう。  
このまま、ここに居ても問題は起こりそうにない。  
でも、出掛ければ、何も始まらない。  
黄金虫が言っていた命の長さ。

どうしよう……。葉の裏でじっとしていると、体が、むずむずし始めた。本能在、黄金虫が言っていた2回目の脱皮が始まったことを告げる。苦しい時間がはじまった。しかし、大人になるという希望もある。反面、怖くて仕方がない。かつて水中で何度も脱皮した事は遠い昔のようで、記憶の彼方。何処かで任せればいいと語りかける声がする。

かろうじて自然の導きに身を委ねた。そうでなければ、抵抗してきぞや苦しい時間が続いたに違いない。脱皮後の体が固まるまで、じっとしていた。その間、かげろうは考えていた。まばゆい世界が、昨日は、奇跡に満ちたものに見えたのに、今日は、恐ろしいものにも思える。

僕が生まれてきた事には意味があるのだろうか。空ではせわしなく青空に雲が形を変えながら過ぎてゆく。すぐ傍に、今しがた脱いだばかりの自分の殻が木の葉に、はかなくしがみつく。

つい先ほどまで、自分のからだを覆い尽くしていた衣装。魂のないヌケガラ。うつせみ。自分がその中に存在していたとは思えないくらいはかないから。ここから、次の点へ瞬間移動したかのような形骸がそこにあった。次第に体が温まり、ほぼ固まってきた。からだが固まると、木の葉の上に、飛び乗って、じっとしていた。どうしようかな。

仲間を探しに行こうか……。どうしようかな……。何十ぺんか、かげろうはそう思った。世界は、広くて、何が起きるのか予測も付かない。限りない未来が希望に溢れているとも取れるし、昨日の出来事から、予測のつかない危険がつき物のようにも思える。

このままじっとしていたい。果たして、飛び出して、何が待ち受けているのだろうか。取りとめもないことを思う。誰かと巡り会えるのだろうか。もう、随分と長いこと、じっとしていたような気もする。ほんの束の間だったのかもしれない。実は、余り離れていない、別の大きな幹の木の梢の葉裏に、別のメスのかげろうがいたのだが、じっとしていたために気づけなかった。

「かげろうよ、飛んで行ける羽があるのに、何故、ここにいるのか？」  
どこからともなく、声がした。

「誰？」

「桜の樹じゃ。ここに居る。お前のいる樹じゃ。」

木にも名前があることを知る。

「おじやましています。」

「おう。邪魔はええが、ここに居る時間はおまえにはないじやろう」

「あ……」

「時間は至宝のかけらじゃ」

「あ、あの、昨日、生まれたときには、自由に空が飛べて、うれしくてしかたがなかった。だけど、蜘蛛の糸や、他にも、怖い目にあつて。もしたら、飛びたくなくなつたんです。」

「ほお……」

「一杯、いろんな世界を見てみたい気もする。でも……。このままここにいてもいいかなあ……。もしも、おじやまでなければ」

「わしは、ずっとここに居る。生まれて、今日まで、どこにも行つたことはない。」

「え？」

「わしや、ほれ、そこに生え取る草や花は、飛んでいく事はできん」

「そうなんですか」

かげろうはびっくりした。

気温が陽射しで見る見る上昇していく。

太陽は、更に高く気温もぐんと上がり、燦燦と辺りを照らしだす。

草いきれにむっとする。

「飛べるのが当たり前と思つて……桜さんたちは、飛べないんだ……」

改めて、かげろうは、自分の羽根を見つめた。

「飛ぶことを与えられたものもあれば、地に根を張つて生きる事を与えられたもんもおる。それぞれの分じゃなあ」

「分……？」

「それぞれの持分じゃあ。」

「持分……あの、僕の命は、ほんのわずかだといわれた。わずかつてこともわからないんだけど。もしたら、怖くなつたんだ」

思わず、かげろうは言った。

「お前には、自由に飛べる羽根があるのになあ……」

桜の葉は、陽射し照らされ、風にそよいでいる。

蝉がけたたましく鳴く。

「ぼくは、きつと 臆病者なんだ」

「そうかう」

桜の木は、しばらく、じっと黙っていた。

蟬の声が響き渡り、それ以外の音はなく、染み渡るような静かさ  
さえ感じられる。

かげろうが、よく見ると葉っぱは、たくさん虫食いだらけ。

毛虫たちも、別の葉の上で、動き回っている。

「びっくりしたかげろうは目を丸くして、」

「葉っぱを、毛虫が食べてる。痛いでしょ？」

「いやいや、わしの葉が誰かの役に立つなら、それでよし。わしを  
養う分は十分にある。」

「何のために、生まれてきたんだろう？」

「さあな。わからんなあ。50年以上ここに居ってもわからん。じ  
やが、わからんでも、生きていける。」

「……」

「じゃが、お前さんのように、次に起きるかもしれないことを考え  
ても時間は流れていく……」

「何もしないうちに時間は過ぎていくんだ……」

「かげろうや、ひと桜時間を知っておるか？」

「ひと桜時間？」

「むしろ、桜の木、一本の一生の時間なんじゃ。ものすごい長い時  
間を持つものもあれば、あっけないものもある。いわば、与えられ  
た時間じゃあ。それぞれに、許された時間がある。それをいかに生  
きるかじゃなあ」

「僕にもあるんだね」

「かげろうの時間は、一かげろう時間かのう」

「わしは、ここで、周りの声を聴く。わしは、ここで春に花を咲か  
せる。花は実を結ぶ事はない人が集まる。ここで、桜並木で宴会が  
ある。」

滔々と桜が語る間、見渡す。桜並木が延々と続いている。河川敷  
き。川はからから。

遙か先をたどると広いきらきら照り返す海原が見えた。

海は青磁色に輝いていた。

空では雲が折り重なり始めている。

ずっと向こうには、建物が立ち並び白く輝いて見える。

「初めて見る風景じゃろう。わしらはここで、夏には葉を茂らせて、  
秋には紅葉させる。葉を地上に落として、皆を守る。わしの来年の  
ためにも冬はお休みじゃあ。森や空や星や月……それから風や鳥や  
虫。みんな、今を大切にしているんじゃない。それぞれに、役立ってい  
るのう」

語る途中にも鳥がやって来て、ついと虫をついばむ。

毛虫は、せつせと葉っぱの形を変えて行く。

蟬やカブトムシは、熱心に桜の樹液を吸っている。

「なにも、無駄なものはない。」

かげろうは桜の木の上で続いている営みを見つめていた。

「もしも、もしも……ばかりを考えていても、時間は経つんじやよ。ほうら、じつとしていても食べられる。飛んでみればいい。与えられた時間を楽しく過ごすんじやよ。今を生きていなけりや、本当は生きていないのと同じじやなあ。生まれていて本当は、死んでいる。本当に死んでいるのとは、もつとたちが悪いのう」

「生きている時間……」

「お前さんや、今、生きておるんじやろう」

「生きている」

「やれやれ、ようやくわかったかのう」

「生きてる……死んだんじやない……でも、いつか終わりがくるんだよね」

「終わりは終わりがどうかのう……生きてみないものには語れんじやろう。」

すぐ傍を、ふわりふわり綿毛が飛ぶ。

透明な水色青の空を背景にあざみの綿毛。

風に身を任せてさも気持ち良さそうに、あちこち、漂っている。

「さくらさん、さようなら」

「おう、いい旅だねえ」

あざみの綿毛に羽根はない。

とても幸せそうに見える。

銀色の繊維が光り輝いて見える。

風任せに、漂っているらしい。

「何処までいくの？」

「行ける所までさあ」

当然だろうと言うようにアザミは答えた。

「行こう！ 君、飛べるんだろう？」

うれしそうにくるくる舞う綿毛もある。

かげろうは、心が平靜になってゆくのを感じた。

何かを探そうとしても、どこかへ行こうとしても、自分の思い通

りには、ならないものなかもしれない。

ならば、身を任せて。

かげろうがここに来たことにも、何か意味があったのだろうか。

何か、大きな力が、働いているようにも思える。

改めて、世界が、輝かしいものに思えた。

かげろうの、縮こまっていた体が、軽やかに変わった様に思えた。

「ここに居るのも自由。飛び立つのも自由。自分の持ち時間じやか

らな」

かげろうの心は、穏やかになっていた。

せわしなく飛び交う雲が海の彼方では、積み重なり、雲間から海面に光芒が伸びてる。

「あれは、天使の梯子じゃあ、いつもある訳じゃない。すぐに消える」

見事な光の梯子は、形を変え、しばらくすると消えた。

「保証があるものは何もないのう」

「何もしなくても、そこで終了。じっとしていても、他からぶつかってくる事もある。身を潜めて、じっと息を凝らしていて過ぎるというものじゃあないなあ。誰かが変わりに生きてくれる訳じゃない。かげろうよ、学んだじゃろう」

かげろうは、延々と続く緑の並木から更になだらかな丘、山へと続くのを見渡した。

世界はなんて広いのだろう。

「いい日和じゃ」

桜は、穏やかに言う。

「雨の日もあれば、日和のいい日もある。今日がいい日じゃなあ」

「おう、雨ならお前さん、飛べんじやろう。今日みたいな日は旅しやす」

「旅日和かあ」

「おう」

かげろうの瞳に希望が灯った。

「未来と今となあ」

先ほどから、かげろうは時折、羽を開いて飛べるか試していた。

「ありがとう。桜さん。ぼくも、旅立ってみる。」

桜が、微笑んだように見えた。

「ああ、行っておいで」

かげろうは、青空の中に飛び上がった。

これから先、何があるかはわからない。

果てしない海ではなく、川の源流へ行こうと決めた。

桜の梢が遠ざかり、かげろうは、空にまぎれて見えなくなった。

かげろうからも桜並木は遠ざかり、時に高く、日向を飛んだり、

日影を飛んだり、時に木々の間をすり抜けながら。

今、かげろうは生まれた池から遠く離れた緑影が美しいせせらぎにいた。

太陽は、もう随分と高く昇りつめていた。

かげろう

蜻蛉エフェメロス（はかない命）

英語では、*dayfly, an ephemera* , 蜉蝣

フライフィッシングの疑似餌として有名です。

研究が進むにつれ、種類も増えつづけています。まだ、研究のものも多いものです。

かげろう目…円筒形のからだ、2対の羽、2から3本の細長い尾をもった昆虫

成虫の寿命は短く、羽化後、数時間のうちに交尾し産卵して死んでしまうものや、数日生きるものも多い。世界中では2000種類以上。日本には約10科109種います。

カゲロウ・コカゲロウ・ヒトリガカゲロウ・ヒラタカゲロウ・コカゲロウ

ゲロウ・カワカゲロウ・モンカカゲロウ・シロカゲロウ

生活のサイクル…卵―幼虫―亜成虫―成虫

\*亜成虫の期間があるのはかげろう目だけに見られる特殊な成長段階。形態は成虫と同じで、飛ぶことは出来るが眼が発達していません

産卵…3タイプ「水面に腹をくっつけるようにして産卵を繰り返す」

「空中から水面の卵のかたまりを産み落とす」水中にもぐって石の裏面に産み付ける」

幼虫…足は6本、腹部にえらがあり、尾は2から3本、体型は生活環境にあわせた平たい丸いなどある。水のきれいな川にすむものが多い

亜成虫…幼虫から脱皮して羽を持つ成虫に近い亜成虫となる。半日から数日後、もう一度脱皮して成虫になる